

2020年5月31日CS中高科奨励 使徒言行録2章1～13節「神の偉大なわざが現れました」

みなさん、おはようございます。…といっても、今もまだ教会を閉じているので、この話はデータ送信という形でみなさんに送っていますが、届いているかな。何より、いかが過ごしていますか。

今年の4月12日はイースターでした。おさらいすると、その昔、その二日前の金曜日、私たち人間を父なる神様からの裁きから救うため、御子であるイエス様は全くの無罪無実なのに、その人間の罪をあえてかぶり、十字架の上で処刑されました。そして三日目の日曜日、あらかじめ約束されたとおりに生き返って、つまり復活して弟子たちの前に現れました。それが復活祭、イースターです。

今朝の聖書箇所は、そのイースターの前の金曜日（もともとは過越祭の日です。出エジプト記12章を見てね）から数えて50日目のできごとです。50日ということで、五旬祭とも呼ばれ、もともとのギリシャ語ではペンテコステと言われますが、もとはユダヤ人の春の収穫祭でした（レビ記23章15～16節を見てね）。

その祭の日に、聖書に記された不思議なできごとがあった。イスラエルの片田舎（！）ガリラヤから来た十二弟子が、めいめい満たされた聖霊により、「ほかの国々の言葉で話した」とある。おそらく、弟子の多くは読み書きも満足にできないくらい、貧しい生まれ育ちのはず。ましてや外国語をペラペラ話すなんてありえない。だから、居合わせたユダヤ人たちがアゼンとしたんだね。

7節以下を読むと、十いくつもの地名が出てくるけれど、どれも今でいう地中海世界だね。南ヨーロッパとか、中東とか、アラブとか、北アフリカとか。「え？それだけ？」と思うなかれ。これらは、そのころのユダヤ人が知りうる世界の全てなんだ。だから、世界中の言葉を一度に、それも、おそらく教育というものをまともに受けていないだろう十二弟子が話したのだから、居合わせた人々がおどろくのも当たり前だ。

さて、今朝の聖書箇所が私たちに伝えたいことは何でしょう。

それは、今現在の教会はここから始まったということ。み言葉はヘブライ語を読み書きできるユダヤ人だけのものではなく、日本人には日本語で、韓国人には韓国語で、アメリカ人には英語で（だけとは限りませんが…）、つまり、それぞれの人々の母語に合わせてみ言葉が語られる。つまり、旧約聖書のヘブライ語や新約聖書のギリシャ語ができなくても、世界の全ての人々が神様の救いにあずかれ、かつ父なる神様を讃えられるのです。

…とはいえ、それが本格的に始まったのは、16世紀にマルティン・ルターが宗教改革のひとつとして、旧新約聖書をドイツ語に翻訳してからのことですが。でも、同じ16世紀にイエズス会が日本に布教に来て、聖書の日本語訳を手がけたのは覚えておくべきだね。先人たちが続けた努力で今こうして日本語で聖書が読める。そのことを覚え、それを支えみちびいた神様に感謝しましょう。